

厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等政策研究事業(難治性疾患政策研究事業)
 分担研究報告書

脊柱靱帯骨化症に関する調査研究

研究分担者 波呂 浩孝 所属機関名 山梨大学

研究協力者 大場 哲郎、江幡 重人

研究要旨 頸椎前方除圧固定術の症例を対象にEAT-10とHK-スコアを用いて嚥下障害を検討した。術前から嚥下障害を有する症例があり、高齢、喫煙歴、頸椎局所後弯がリスクファクターであった。

A．研究目的

頸椎前方手術の術後に2～83%に誤嚥が発生し、長期遷延例も報告されている。また、最近摂食嚥下障害の臨床重症度と高く相関するEAT-10の質問票が利用されている。さらに、嚥下内視鏡検査では障害程度の指標としてHK-スコアが使用されている。よって、本研究の目的は、頸椎前方固定術後の嚥下障害をEAT10とHK-スコアで評価し、そのリスクファクターを検討することである。

B．研究方法

頸椎前方除圧固定術を行った38症例(男17、女21;平均68歳、平均2.3椎間、経過観察期間1年以上)を対象とし、術前、術後1週、術後1年のEAT10、HK-スコアを計測した。また、患者背景と手術因子、術前頸椎アライメントについて嚥下障害との関連を検討した。
 本研究は施設内の倫理委員会で承認を得て、承諾書を研究開始前に対象者から取得した。

C．研究結果

術後1週で34%、術後1年で25%に嚥下障害がみられた。また、術前に8%に嚥下障害があった。高齢と喫煙、術前のC3-5の局所後弯が嚥下障害と相関がみられた。

D．考察、

EAT-10を使用した主観的評価と嚥下内視鏡による客観的評価を用いた研究で、頸椎前方手術後に3割程度の患者に嚥下障害があり、その25%は術後1年まで遷延化することが明らかになった。さらに、術前から嚥下障害を有する症例があることがわかった。高齢の患者、喫煙歴、頸椎局所後弯の症例は嚥下障害のリスクが高いため、手術周術期あるいは術前から耳鼻咽喉科や言語聴覚士の関与が必要である。

E．結論

頸椎前方除圧固定術の症例を対象にEAT-10とHK-スコアを用いて嚥下障害を検討した。術前から嚥下障害を有する症例があり、高齢、喫煙歴、頸椎局所後弯がリスクファクターであった。

F．健康危険情報

総括研究報告書にまとめて記載

G . 研究発表

1. 論文発表

準備中

2. 学会発表

(発表誌名巻号・頁・発行年等も記入)

第 47 回日本脊椎脊髄病学会学術集会

頰椎前方固定術前後の嚙下障害評価とリスクファクターの検討～嚙下内視鏡とスクリーニング質問シートを用いて～ 大場哲郎, 江幡重人, 岩間 達, 勝 麻里那, 波呂 浩 Journal of Spine Research Vol.9 No.3 686 2018

H . 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし